

# 人文考

## 京大人文研創立90年

白人、黒人、黄色人種……。人種と言えば、肌の色にもとづいた古典的な分類を思い浮かべられるかもしれません。ですが、初めに強調したいのは、生物学的な意味での人種というものは存在しない、という点です。



たけざわ やすこ  
文化人類学、人種・エスニシティー論。人種をめぐる国際共同研究の代表者も。

人種を「色」で分類する人種観が広まったのは、18世紀末、ドイツの人類学者、ヨハン・ブルーメンバツハが世界各地から集めた頭蓋骨を、「コーカシア」「モンゴリア」「エチオピア」など五つに分類し、それぞれの肌の色を「白色」「黄色」「黒色」などと特徴づけたことに端を発します。

当時は、旧約聖書でノアの



人種分類にもとづく図版が掲載された明治時代の教科書＝筑波大学付属図書館所蔵、竹沢泰子さん提供

## 竹沢泰子教授 (文化人類学、人種・エスニシティー論)

箱舟がたどり着いたとされるコーカサス山脈南方のアララト山が人類発祥の地とされ、そこで見つかった頭蓋骨を「コーカシア」と名付け、一番美しいものとしたのです。こうして誕生したのがコーカノイド、ネグロイド、モンゴロイドのような人種概念です。この分類は日本でも遅くとも戦末までには紹介され、明治以降、教科書を通じて定着しました。現在でも大手の地理の教科書や事典類に記載され、人々の頭の中に根をたくろっています。

しかし、1953年にDNAの二重らせん構造が発見され、遺伝学が発展すると、人類はアフリカに起源をもち、そこから世界各地に移動し、その途中でもゆるやかに変わっていったことが明らかにになりました。



「嫌韓」などを訴えるヘイトデモ参加者に対し、「人種差別反対」などのプラカードを手に抗議する人たち＝2015年5月、名古屋

# 根強い人種神話 差別乗り越える英知

ました。人類の変化はいわば連続体であって、人種の境目があるわけではないのです。実際、ヒトゲノムの解読により、同一集団内の多様性のほうが集団間の多様性よりもはるかに大きいということがさまざまな研究で指摘されています。人種概念には科学的な根拠などないのです。

2013年、京都の朝鮮学校の前で、「在日特権を許さない市民の会」(在特会)が行ったヘイトスピーチに対し、京都地裁は判決で「人種差別」にあたるとして賠償を命じました。翌年にはJリーグの試合で「JAPANESE ONLY」という横断幕が掲げられ、「人種差別」だとして無観客試合となりました。これらの標的は身体的に差異がない人々でした。人種概念には三つの特性があります。出自など「生まれながらにして変えることができない」と信じられていること、序列関係があること、政治・経済・社会的利害を結びついていることです。

この理解にもとづいて、日本の被差別部落への身分差別や在日コリアンへの民族差別、ユダヤ人やロマなど世界各地に近代以前から現代まであるさまざまな差別も人種差別とも言えます。差別のされ方も似ています。多数派とは異なる特殊な職業に就き、種

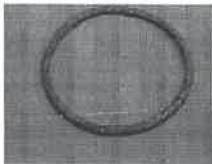
## 私のイチオシ本

共同研究「人種表象の日本型グローバル研究」の成果を本にしたシリーズ「人種神話を解体する」(全8巻、東京大学出版会、2016)は、さまざまな人種や差別がいかに創られたのかを解き明かす。ほかに竹沢泰子編「人種概念の普遍性を問う」(人文書院、2005)なども。

# 弥生期の度量衡 東アジア共通か



「環権」をのせてたんぽんで重さを量る想像図＝滋賀県東市教育委員会提供



銅環(環権)(2世紀後半) ドーナツ状のおもりの可能性が指摘されている「銅環(環権)」＝滋賀県東市

## しもまがり 滋賀・下鈎遺跡のリング、「環権」の可能性

弥生時代、西日本に共通する度量衡(長さ・容積・重さ)の統一はあったのか。滋賀県東市の弥生時代の集落跡、下鈎遺跡で20年前に出土した青銅製のリング(2世紀後半)について、最近、天秤を使って重さを量る「環権」と呼ばれるおもりだった可能性の書けことが判明した。環権は中国大陸や朝鮮半島でもみつきり、専門家は、日本列島でも東アジアに共通する計測基準が使われた可能性が指摘されている。国内各地で多様なおもりが確認され始めており、弥生社会の経済活動や生産システムの解明につながるかも示れている。



原の辻遺跡で出土した青銅製の「権」

で、天秤はかりに使うおもりの可能性が高いことが明らかになった。下鈎遺跡では、青銅製の鋳造や水銀朱を生産していた痕跡も出土し、東市教育委員会の担当者は「銅とスズを割合したり、朱の量をはかったりしたのではないかとみる。近畿では、ほかにも大阪の亀井遺跡や池上首根遺跡などでリング状ではないが、分銅とみられる円柱状の石製品が確認されている。長崎県壱岐市の原の辻遺跡では、釣り鉤形をした天秤のおもりとされる「権」も出土している。

大阪府立弥生文化博物館の中尾智行総括学芸員(考古学)は、下鈎遺跡出土の環権について、亀井遺跡の分銅などとは基準となる重さが微妙に異なること、指輪「金属の割合に使うには小さすぎる気もある。石製と銅製では用途の違いがあったのかもしれない」とみる。

武末純(福岡大学教授、考古学)は、積極的に貨幣経済と結びつけて評価する。武末さんは、中国の前漢と後漢の間に新(8〜29年)を建国した王莽が秤造を始めたこととされる「貨泉」と呼ばれる銅銭が列島各地の遺跡から出土することなどから、弥生時代の列島にも流通経済が存在したとみる。下鈎遺跡の環権もその傍証と想定し、「東アジアで共通する度量衡の体系が広がっていたのでは。韓国では筆や削刀と一緒に環権がみつかったり、想像をたくましくすれば、文字を介した交易や貨幣経済があった可能性もある」と踏み込む。(編集委員・中村俊介)